

『元禄世間咄風聞集』所載の

医薬学関連の咄

浜田善利

私は先に『耳囊』に記録された民間療法を検討して、日本医史学雑誌、第三九巻第二号、(平成五年)に発表した。『耳囊』は一八世紀終わりから一九世紀の初めにあたる天明年間から文化年間にかけての三〇余年の聞書であるのに対して、本書は一七世紀末から一八世紀初頭にかけての記録である。したがって本書は『耳囊』よりおよそ一世紀前に江戸で記録された咄と考えることができ

る。『元禄世間咄風聞集』は東京大学文学部国文研究室に蔵されているもので、『世間咄風聞集』のタイトルのもとに一括して整理されている写本の翻刻である。本書は校訂者の長谷川強氏により校注を付され『元禄世間咄風聞集』と題して、一九九四年一月に岩波文庫から発刊されて

いる。

『世間咄風聞集』は他に伝存が知られていない本であるから、今回の発刊が初めての公刊となる。この岩波文庫本を本研究の底本として用いた。

本書は全部で十一巻から構成されていて、元禄七年(一六九四)から十六年(二七〇三)七月までの咄を収録したものである。刊本に添えられている解説によると、主として江戸の世間咄の聞書であり、聞書の元になった話者は、老中から、高級旗本、碁打・検校やいろいろ芸人らしい人物に及んでいる。

本書に収められた咄の中には、大別すると次の話題が含まれている。

- 一、大名・旗本関係
- 二、生類憐み令関係の話
- 三、落首・落書、狂歌
- 四、民間のニュース
- 五、巷説
- 六、犯罪
- 七、奇談・怪談・由来談

八、落し話、巷説の体裁をとった落し咄

(熊本工業大学)